

4.Q4 教員として、授業改善を通して大学の活性化を図るためにはどうすればよいか

自由記述として次のようなコメントが寄せられた。

1) については多数の教員からの分をまとめたものであり、2) 以下は個人の意見の主なものである。

- 1) 授業公開についての意見（多数の教員からの分）
 - a. モデル授業の公開を期待する。
 - b. 非常勤を含めて分野ごとの授業参観、公開授業を行う。
 - c. 学科内でお互いの授業を参観し合うようにする。
 - d. 授業評価の高い授業の公開・参観を早く実施する。
 - e. 授業相互公開を必ず実施してほしい。
 - f. 授業公開を各教員に義務付け合評会を開く。
 - g. お互いに授業内容について自由に話し合える環境をつくる。
 - h. 授業改善の勉強会を気楽に持てるようにする。
 - i. 授業だけでなく教員研究発表会への参加を義務づけ、年1回でなく数回開催し、全ての教員が発表するようにする。これをホームページに掲載し、本学での授業内容、教員の研究姿勢を公にする。
 - j. 学科内の教員間で本音で話し合える温かい雰囲気があれば、お互いに授業改善についても前進できるのでは。
- 2) 「今後の大学教育のあり方」について、
 - a. 人間を育てているという意識を教員一人ひとりが認識すること。
 - b. 公開授業を積極的に取り入れる。
 - c. 研究業績をオープンにする。
 - d. 学生との関係づくりに積極的に取り組んでいるモデル事例を紹介する。
 - e. 上記に加えて、地域との連携も視野に入れた活動を紹介する。
 - f. 教員が教員たるモチベーションが上がるような大学教育体制の構築。
- 3) a. 学生教育ニーズに応じて、学生がやる気をもって取り組めるような授業・プログラムをデザインしていくこと。
b. 社会の人材ニーズに応じて、現場で求められている実践のための基礎をしっかりと身につけさせる。
c. 資格は必要であるが、実践のための力を証明するものではない。
d. 取っても仕方ないような資格は捨て、時代のニーズに応える新しい資格、確かな人材ニーズに応える資格に積極的にチャレンジさせていく。
- 4) a. 教員の採用の民主化を図る。ともすれば個人の好みを power で押し付ける傾向がある。
b. 現在の流動的な状況下において、期限付教員の昇格は充分慎重にすべきである。
c. 古くからいる教員は教科内容に保守的であってはならない（その傾向が強い）。
d. 65歳を定年とし、再任用制度を設ける。また15～20年毎に契約を更新する。
e. 学科のコンセプトを明確にし、その方向に沿って授業する。
- 5) 学生の能力の差が年々広がりつつある。クラスを分けることができるとよいのだが。
- 6) a. 教員が学生と向き合う時間や機会をつくる必要がある。
b. 教員自身、担当教科に今何を求められているのか、常に社会の動向

にアンテナを張る努力をし、授業スケジュールを決める努力が必要である。

c.15 コマの中で学外講師を招聘し、特別講義をしてもらう1コマ位が欲しい。

- 7) 少人数制の教育を進める必要がある。
- 8) 教員の教育者としての教育プログラムが必要である。
- 9) 常に新しい情報を取り入れ、授業内容を魅力的なものにし、広い視野からの的確な情報を入手するには、教員が学外で勉強する余裕がもてる環境が必要である。
- 10) 最も効果的な方法は、受講学生を30名以下とし、顔の見える授業をすることである。
- 11) 補講などの回数増加が負担である。量よりも質を重視したい。
- 12) a. 研究能力の向上がひいては教員の資質向上につながるので、たんなる授業テクニックだけでなく、研究環境の改善が望まれる。
b. 学外講師、社会の現場の話は学生の意識を高めるのに役立つので、特別講師招聘をもっと奨励すべきである。
- 13) 複数教員で一つの、例えば電子教材を作成し活用する。その際、LMS（学習管理システム）を利用する。
- 14) 教員に十分な研究や授業のための時間を与える。授業改善はあくまでも研究の充実がベースである。学生は研究の裏づけのない授業に良い反応を示さない。
- 15) 授業をせめて1クラス単位にする。3クラス合併ではとても全員に対応するのが難しい。
- 16) 助手の期限をなくしてほしい。教育的配慮を最も欠く部分であると思われる。教育の質の向上を目指すのであれば、学生に最も近い存在である助手が毎年入れ替わっているような現状では困る。
- 17) 授業改善は教員個々の専門性から学生の内的・実質的なニーズに応えていくことが基本である。教員個々の専門領域において最先端の情報と知識を常に追求していくことが重要と思われる。大変長期的な浸透ではあるものの、その積み上げが学生からの評価、社会的評価を上げ、ひいてはそれが大学の活性化につながるのではないかと。
- 18) IT機器、e-Learning教育の導入とサポート体制を確立する。
- 19) 教員の授業改善に対する自覚、姿勢はいうまでもないが、大学の活性化につながるためには組織的な整備が必要である。総合教育開発センターを一つの中心とした組織づくりを早急に進めるべきである。現在多くの委員会が組織されているが、それぞれバラバラの状態でチグハグな討議がなされているように感じられる。授業改善以前の問題として、教育環境の改善（設備、スペース、人数、助手の配置等）が望まれる部分もある。
- 20) 資格取得教育を目指すコンペティターが増加していくなか、就職に直結しない「えさ」としての資格取得教育は遅からず魅力を失っていくだろう。社会を目前にした大学生に教育面での顧客満足度を高め、未来への勇気を感じさせることができるかが最も重要である。それには教員の教育・就職支援への熱意が基本である。また職員も教育・就職支援のサポーターとしてサービスの質を高める必要がある。教職員の熱意ある取り組みを評価する仕組みの実現なしには改革も活性化も内実を伴わないものになってしまう。

「教員に対するアンケート集計結果と今後の対応」

1. 大学におけるFDの現況

文部科学省は大学の質を高めるため、2008年度にも全大学に教員を対象にした授業方法の研修などを義務づける方針を固めている。大学設置基準を改正し、現在は努力義務としている研修などの実施、組織的に教員の能力開発を進めるFDを義務化としている（日本経済新聞2007年1月16日）。大学全入時代の到来で大学教育の質の保証が求められており、教員の意識改革を促すことが必要であるという判断からである。

2004年の文部科学省の調べによると、大学が実施しているFDの主な内容は、

- 1) 教育方法改善のための講習会の開催
- 2) 新任以外の教員の研修会
- 3) 授業検討会の開催
- 4) 学内組織の設置
- 5) 新任教員の研修会
- 6) 教員相互の授業参観
- 7) 授業方法改善のためのセンター等の設置
- 8) 教員相互の授業評価

などがある。

2. 本学における「教員に対するアンケート」結果

平成18年12月に「教員に対するアンケート」を実施した。今回は専任教員142名に対して行ったが、アンケート提出数は103名で、回収率は72.5%であった。上記アンケートの結果を図1～6に示す。

図1の「Q1 授業について」においては、授業に対して学生の理解度を高めるための努力を全教員が積極的に行っていることがわかる。

図2の「Q2 シラバスについて」では、シラバス通りに授業を行っているか、また授業の進捗状況に応じてその都度シラバスの改訂を行っているか、いま一步のところが見られる。

先に各教員に返却した「学生による授業アンケート」

の集計結果のQ10「あなたはシラバスを理解して授業にのぞみましたか」を各教員がもう一度確認していただきたい。教員、学生の相互において、シラバスの積極的な利用を進めることが今後の大きな課題であると思われる。

図3の「Q3 授業改善について」の教員の取り組みにおいて、教員の認識が不足しているように見受けられる（とくにQ3-1、Q3-2について）。

図4の理解度をチェックするための方法として、「ミニテスト」、「質問」が、理解度向上の補助手段として良かったものとして（図6）、「ビデオ」、「プリント」があげられており、各教員の努力の跡がうかがわれる。

最後に、「Q4 教員として、授業改善を通して大学の活性化を図るためにはどうすればよいか」の自由記述に対しては、有益かつ建設的な多くの意見が寄せられた。**4.**に主なコメントをまとめた。これについては、機会があるごとに話題として取り上げ、参考にしていきたい。

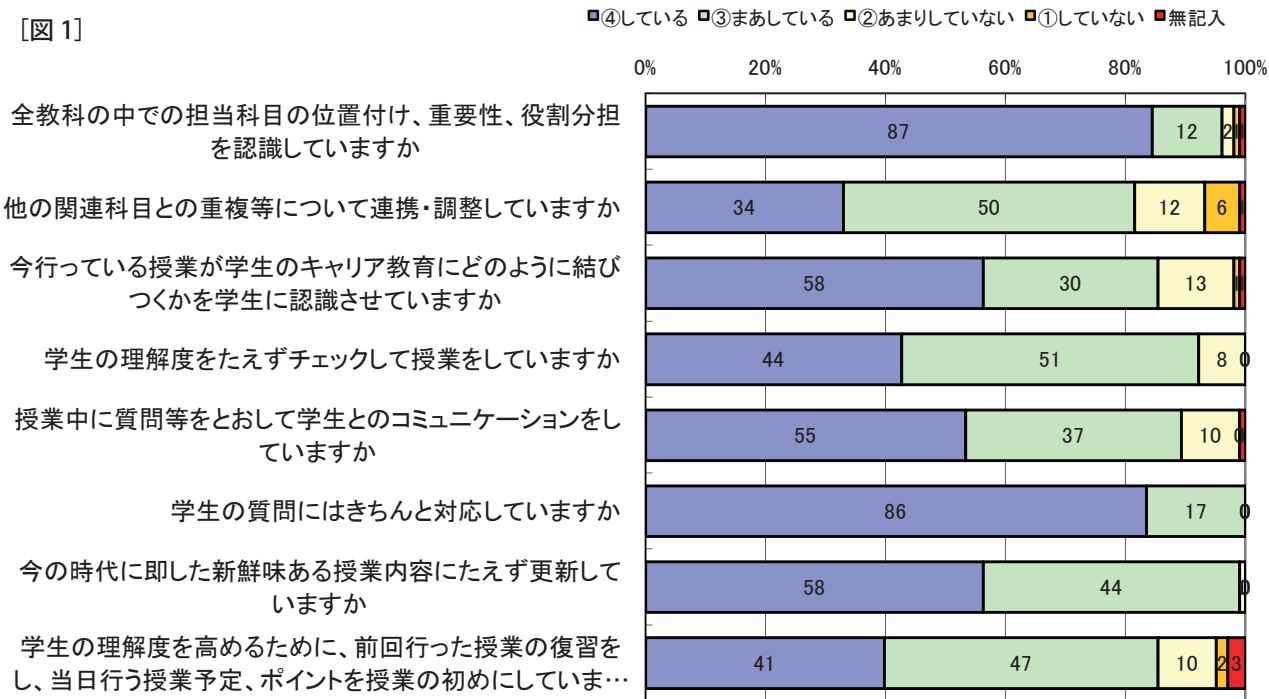
3.FDの義務化と今後の対応

教育方法改善のための講演会、研修会などへの教員の出席率が低く、授業の改善が必要な教員が参加しないことが多い点が各大学でささやかれている。われわれ教員はFD活動に対して「深海魚」であってはならない。「深海魚」とは、上層の海面で大波がきても、光が射し込んでも、深海でじっとして、ウンともスンとも動かないたとえとして使われているようである。

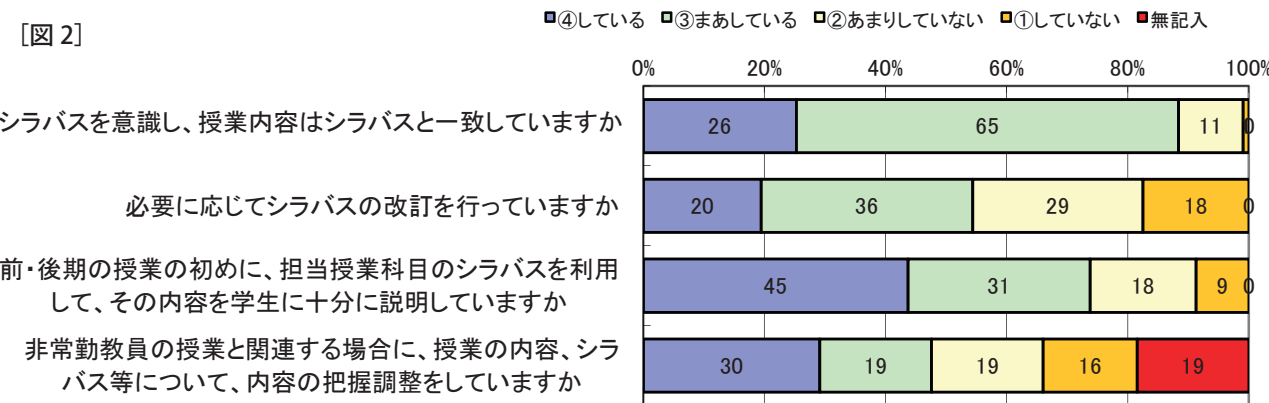
いま大学には様々な面で大波が押し寄せていることを認識する必要があり、教員の意識改革が求められている。

しかしFDの義務化が「受動的研修の強制」だけに終わってはならない（日本経済新聞2007年3月19日）。最後に、このアンケート集計結果をふまえて、各教員の授業改善への更なる積極的な取り組みを期待したい。

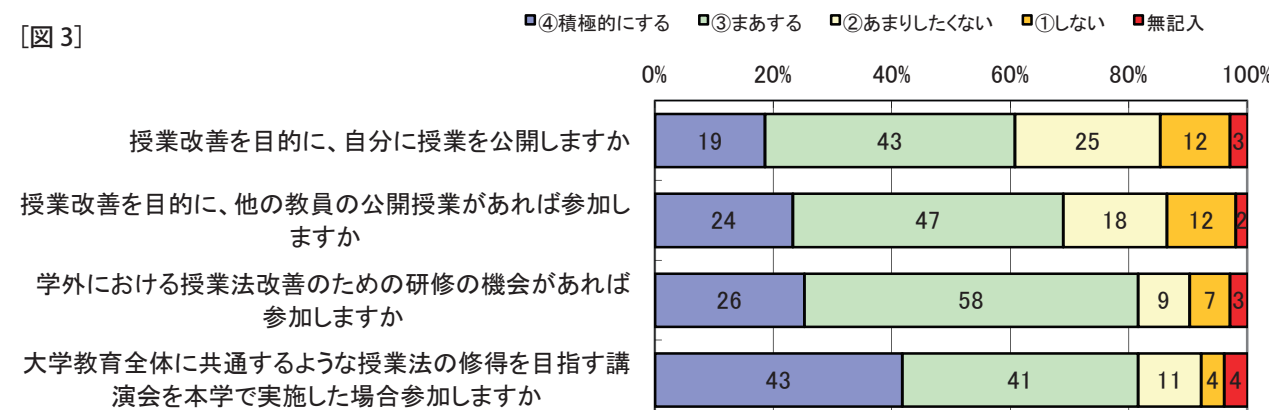
Q1 授業について



Q2 シラバスについて

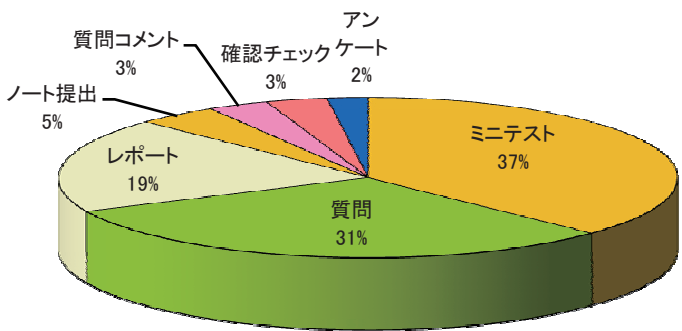


Q3 授業改善について



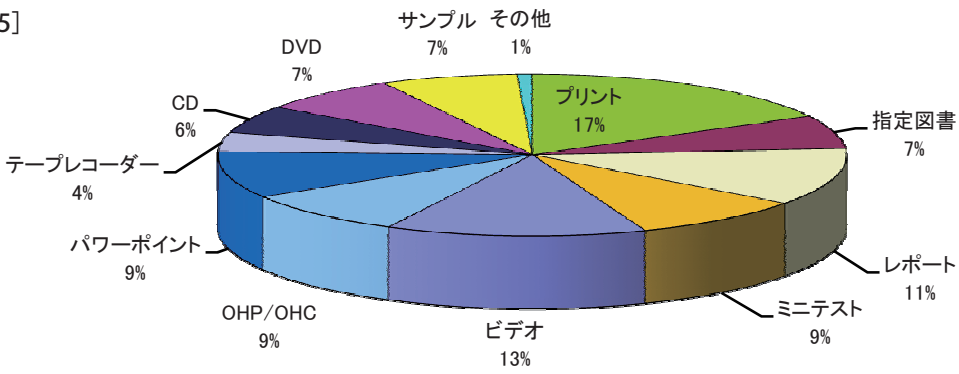
Q1-4D 学生の理解度チェック方法

[図 4]



Q1-9 学生の理解を助けるための補助手段

[図 5]



Q1-10 学生の理解度向上に良かった補助手段

[図 6]

